

令和 元年 6 月 25 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16164

研究課題名（和文）疑似科学と図書館に関する多角的な研究

研究課題名（英文）Multifaceted study of pseudoscience and libraries

研究代表者

岡部 晋典（OKABE, Yukinori）

愛知淑徳大学・人間情報学部・講師

研究者番号：60584555

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、疑似科学と図書館の関係を研究した。（1）米国図書館協会にてヒアリング調査を行った。米国においては学校図書館の蔵書が主として批判や非難にさらされており、大人が利用する図書は問題視されにくい傾向が得られた。（2）各界で活躍している人々に、これまでの情報行動をインタビュー調査し、それを著書としてまとめた。（3）疑似科学図書と図書館の態度についてWeb調査を行った。その結果、概ね疑似科学図書の所蔵は問題視されていないが、学歴によって、疑似科学図書の排架に対する態度が異なること等が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、図書館における本の選書については（研究者によっては対立構造ではないと指摘されつつも）、価値論と要求論という二つの軸によって対比的に捉えられてきた。前者は図書館は価値のある本を所蔵すべきであり、後者は利用者のニーズをかなえる必要があるという立場である。本研究はこの軸を超え、科学の振りをしているが科学ではない、いわゆる疑似科学図書が図書館に所蔵されることについて多角的に検討した。具体的には「信頼性のある情報の原資を図書館としながらWebにあげていく人々の行為」の描写や、米国における蔵書への批判の現状、人々の図書館蔵書への意識調査などを行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the relationship between pseudoscience and libraries. (1) Hearing survey at the American Library Association: compared to Japan, we found school library collections are often criticized or censored. (2) Interviewed the people active in various fields about information behavior and compiled the interviews as a book. (3) Web survey: Carried out to determine people's attitudes toward pseudoscience books and libraries. We found that the collection of pseudoscience books was not regarded as a problem in general. However, the attitude toward the shelving of pseudoscience books depended on the academic background.

研究分野：図書館情報学

キーワード：図書館 選書 蔵書構成論 疑似科学 インタビュー調査 Web調査

1. 研究開始当初の背景

科学のふりをしているが科学ではない「疑似科学」が社会問題になっている。2000年代初頭、水に「ありがとう」と言うと綺麗な結晶になり、汚い言葉をかけると汚い結晶になるといった写真集が広く知られるようになり、これが道徳教育の一部にも用いられるという事例があった。これに対し、科学者やサイエンスコミュニケーターからは多くの批判が寄せられたが、図書館情報学からの反応はほとんど存在しなかった。他にも、正統的な医療として認められない代替医療を信奉したため、かえって病気を進行させてしまう人々がいる。以上のように、情報がより容易に手に入りやすい状況であるからこそ、デマや誤った情報に直面する問題がより一層可視化されている。

従来の図書館では歴史的経緯もあり、このような研究は非常に繊細な配慮が必要であった。なぜならば、戦前の図書館界は(一般に)良書善導運動に協力したとされており、戦後、それに対する反省があったためである。それゆえ図書館は自身が所蔵する図書ないしは知識に対し、差をつけることを忌避する姿勢を保ってきた。これらの経緯もあり、「要求論」という利用者のニーズをかなえることを至上とし、図書館自身が図書の価値を査定する「価値論」は拒否されてきた傾向にあった。研究者によって要求論と価値論は対立軸ではなく、衝突していないという言説もあるものの、一般にこれまでの図書館は「要求論」を主軸として動いてきたと解されている。

ただし、Webの利用の広まりといった情報環境の激変によって、図書館は社会的価値を低下させたともいわれている。そのような情報環境の激変のなかで、現在、図書館は知の伝達を行う機関としての社会的責任と、(仮に誤っている情報であったとしても)利用者から求められる情報ニーズをかなえる必要があるというジレンマに陥っていると言えるであろう。

2. 研究の目的

そこで、本研究では以上の問題意識に基づき、疑似科学の図書を図書館がどう取り扱っているのかについて、多角的な方向で検討することとした。まず、比較を通じ、日本国内の「図書館の自由」観を浮き彫りにすることを目的とした。そして、リテラシーがあると思われる人々が、これまでどのように図書館を利用してきて、どのようにWebとの使い分けを行っているかをインパクト測定すること、最後に、図書館の非利用者をも含め、人々の図書館蔵書への態度を明らかにすることを目的とした。

よって、主として行った研究は3つの柱からなる。

- (1) 米国における「図書館の権利宣言」(Library Bill of Rights)の現状の把握
- (2) 各分野で活躍している人を中心としたインタビュー調査：とくにリテラシーを主眼として
- (3) 図書館の利用者/非利用者に対する、蔵書への意識調査

なお、当初は疑似科学図書の所蔵状況を全国的に調査する予定であったが、類似の量的調査が他の研究チームから行われたため、(2)の質的調査へと舵を切った経緯がある。

3. 研究の方法

以上の3つの研究目的に対し、実際に行った研究方法について述べる。

- (1) 実態把握
2017年9月14日、シカゴのAmerican Library Association(アメリカ図書館協会: ALA)のOffice for Intellectual Freedom & Freedom to Read Foundationを訪問し、Intellectual Freedom担当者への半構造化インタビュー調査を行った。
- (2) インタビュー調査：情報リテラシーを中心に
2015年末から2017年初頭にかけて、図書館のイメージのない人々や、現在の図書館のデジタル化を進めている人々を中心に12名へのインタビュー調査を行った。合計して30時間程度の聞き取り調査であった。12名のインタビューはおおむね4区分に分けられる。(A)図書館利用についてのイメージがそれほどない人々(B)図書館をヘビーに利用していると思われる人々(C)電子情報と紙媒体の往復運動を行っている人々(D)図書館を運営するサイドで、とくに図書館の電子化に深く関わっている人々である。ここでは、Webと紙媒体の資料の使い分けや、これまでの図書館利用のインパクト調査を主眼とした。
- (3) オンライン調査
2018年度末、図書館の利用者、非利用者に対してオンライン調査を行い、図書館の蔵書、とくに疑似科学図書についての人々の態度を調査した。調査会社は(株)マクロミルを利用した。まず、図書館利用頻度ごとの割付のためプレ調査(N=10000)を行い、その後、本調査(N=850)を行っている。架空の疑似科学図書と一行のリード

文を作成し、それに対する図書館への蔵書態度（入れるべきではない/書庫所蔵ならよい/「専門書」と並べなければよい/問題ない）といった区分で質問している。それ以外にも、「図書館の自由に関する宣言」や回答者の属性（学歴）、信念体系（再分配志向が否か/リーダー的か否か、等）をも同時に訊ねることで、どのような属性の人々が図書館の疑似科学の蔵書に対して肯定的に、あるいは批判的に捉えているかを探った。

4. 研究成果

(1) より、米国と日本に対する「図書への検閲」の実態はかなり異なることが明らかになった。我が国では「この本は読むべきではない」といった批判的な言説は、大人向け図書であっても行われることが多いように思われるが、米国においては、他者たる大人は Unique individual であるため、読書への干渉はそれほどないという。一方で、宗教的な問題が介在する ID 説についての図書は、地域性をはらみつつ問題視される事例があり、あるいは、「読書の自由」や「図書館の権利」は往々にして子ども向け図書や、図書館の児童書において問題が顕在化することが多いことが得られた。この結果は、(2)(3)の質問紙を作成するために用いられた。

(2) はインタビュー調査であった。以下では発言の一部を要約し紹介する。

- ・ おおむね、現在においては紙媒体への信頼性が高いものの、紙か・電子かといった二項対立的に捉えるものは存在しなかった。
- ・ 紙媒体で図書を執筆する場合は、編集者とのやりとり等を経るために信頼性は向上するものの、新しい技術には対応しきれないジレンマがある。
- ・ フェイクニュースやデマが流れるなかで、国会図書館や大宅壮一文庫といった資料をもってデマ訂正を行う人々は複数存在する。エコーチェーンパー現象がさかんに言われているなかで、アジェンダそのものは替えられなくとも、その認知のありかたについては変化可能なことが示された。
- ・ 信頼性のある電子資料をもとにするために、紙媒体を用いたマルチエージェント的な活動が各地で行われていた。象徴的な活動として青空文庫がある。

なお、これらのインタビューをまとめることで、『トップランナーの図書館活用術 才能を引き出した情報空間』（ライブラリーぶっくす）2017、勉誠出版 を上梓することができた。なお、本書は図書館情報学関係の学会誌・業界誌や Amazon 書評、読書メモの SNS サービス等で高い評価を受けることができた。

(3) の調査で、図書館利用頻度等において、SSM(社会階層と社会移動全国調査)調査や、東京大学社会科学研究所・若年パネル調査の再分析と同様の傾向が得られた。分析の結果、おおむね図書館に疑似科学図書が入ることには人々は問題視していないことがわかった。さらに大規模図書館と小規模図書館でも蔵書構成への態度の違いはあまり見られなかった。ただし、基礎的なクロス集計および調整済み残差を求めた結果、学歴や図書館の自由に関する宣言についての認知度について、図書館の蔵書に対する態度に有意差がみられた。例えば、高卒以下は疑似科学図書を問題ないとシンプルに答えるものが多く、高等教育経験ありのものは専門的な図書とは別置なら問題ないという、但し書きつきで問題ないとする回答が多かった。さらに図書館の自由に関する宣言を知っていることと疑似科学図書の収蔵を問題視する回答は有意に多く、図書館の自由に関する宣言にある、「資料収集の自由」が唱えるそれとは逆説的な結果が得られた。

なお本データはさらなる詳細な分析を行うため、現在、複数の研究者で再分析を行っている。今後は個人の信念体系や疑似科学への考え方が、図書館の蔵書への態度にかかわっているかといった関係性を明らかにするため、他の統計手法等を用いて研究を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

中村絃子・瀬谷安弘・林大輔・佐藤朝美・岡部晋典「初年次教育科目「基礎ゼミ」が大学での学びの評価に及ぼす効果の検討」『愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇』(9) 1-10, 2019. <http://hdl.handle.net/10638/00008119> (査読有)

浜島幸司・岡部晋典・鈴木夕佳「ラーニング・コモンズ内のエリア別利用傾向と学習成果」:

同志社大学良心館 LC 利用アンケート調査から」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(8) 3-19, 2017. <http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015518> (査読有)
浜島幸司・岡部晋典・鈴木夕佳「ラーニング・コモンズが学生にもたらす学習成果：同志社大学良心館 LC 利用アンケート調査から」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(7) 3-24, 2016. <http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014554> (査読有)
鈴木夕佳・岡部晋典・浜島幸司「学習支援と学部教育はいかに連携できるのか」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(7) 42-62, 2016.
<http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014556> (査読有)
岡部晋典「図書館的な<場>で学ぶということ」『薬学図書館』 61(2) 73-78, 2016. (査読無)

〔学会発表〕(計6件)

岡部晋典・飯尾健・赤山みほ・逸村裕. 「人々は科学的合理性に著しく反する図書館の蔵書をどう見ているのか - Web 調査を手がかりに - 」情報メディア学会第 18 回研究大会 (2019:accepted)
浜島幸司・岡部晋典・鈴木夕佳・中村伸也・野田宣彦・三宅重彰・大島佳代子「学習支援補助者育成の成果と課題 - 同志社大学ラーニング・アシスタントを事例として - 」第 24 回大学教育研究フォーラム. 2018
岡部晋典「学びの場をいかにして構築するか - 高等教育の潮流を示唆として - 」平成 29 年度学校司書等実務研修 冬期全体研究会 (神奈川県)(招待講演). 2017
春名義之・日向良和・岡部晋典・野末俊比古・野田雅基「特別セッション「利用者と ICT でつくる新しい学びと図書館」図書館総合展. 2017
Ikeuchi, Ui; Harada, Takashi; Sato, Sho; Okabe, Yukinori; Itsumura, Hiroshi. "Data Literacy Perceptions and Research Data Management Practices by Researchers in Japan" European Conference on Information Literacy (ECIL) 2017. 2017
鈴木夕佳・浜島幸司・岡部晋典・井上真琴・野田宣彦・山口夏奈・三宅重彰・大島佳代子「フォトダイアリー調査からみるラーニング・コモンズ内での学習実態」大学教育研究フォーラム. 2017

〔図書〕(計2件)

岡部晋典『トッランナーの図書館活用術 才能を引き出した情報空間』勉誠出版, 2017. 312p.
Ryuta Komaki, Fukuji Imai, Yukinori Okabe. "Expatriate Japanese Families as Library Users: A Case Study in a College Town Community in the United States." pp.201-208. Janet Hyunju Clarke (Editor), Raymond Pun (Editor), Monnee Tong (Editor), Clara M. Chu (Foreword). *Asian American Librarians and Library Services: Activism, Collaborations, and Strategies*. Rowman & Littlefield, 2017, 414p.

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。